金大医保紀要 Vol. 21
73～77　1997

基礎看護技術教育における技術内容の選択に関する一考察
―技術内容に関連した書籍検討を試みて―

加藤真由美　稲垣美智子　須釜　淳子
東屋希代子　津田　朗子

KEY WORDS

Fundamentals of Nursing, Contents Selections, Education, Nursing Skills, Analyzing Textbooks

はじめに

1967年の「看護婦学校指定規則」の改正により「看護技術」はカリキュラムとして始めて看護教育の中に確立された。その後，基礎看護教育課程における看護技術は，1974年に提唱された「科学的看護論」に影響を受け[1]，一貫性のある論理的な基礎看護技術教育へと向かい現在までに至っている。

その中で基礎看護教育における看護技術の教育に関し，限られた授業時間で教える内容の選択に困惑しているのが現状である。第一に，日々進む医療の高度化に伴い看護婦に要求される看護技術内容が膨大になっている。

第二に，1951年に最初の保健婦助産婦看護婦養成所指定規則が制定されて以来，1967年，1989年，1996年の改正を経て，ゆとりの教育のため授業時間が減少した。３年制の看護婦養成所における基礎看護技術の総授業時間は1967年の改正では講義と校内実習をあわせて180時間[2]であったのが，1989年の改正で校内実習は講義に含められ175時間へ，そして1996年では75時間[3]となった。

第三に，医療現場において看護の質そのものが問われていることが看護技術の教育に対し影響を与えている。質の向上を推し進める上で，現場が基礎教育に対し，技術教育へより大きな期待をよせている。

看護技術がカリキュラムとして確立されてひさしいが，基礎看護教育における技術内容の選択に具体的な指針がなく，それに関して調査・研究がされておらず，制限された授業時間の中で，いったい何を教育してゆけばよいのかは今日的課題である[3]。

本研究は，教科書またはそれに順ずる書籍の基礎看護技術の内容を歴史的に振り返り調査することにより，まずはどう基礎看護技術内容が推移しているのかを知ることを研究課題とした。

方　法

１．標本の抽出

過去の看護技術および基礎看護技術に関する教科書およびそれに順ずる書籍の内容を検索した。調査対象とした書籍はカリキュラムの改正に着眼し，1971～1997年に発行された看護技術または基礎看護技術に関する書籍から便宜的抽出した11部を調査した（表１）。

２．調査および分析方法

基礎看護技術の各内容を標本から収集し，技術内容ごとに整理，分類し，年代的な推移を追って比較検討した。整理された技術内容の分類化は，データを分析する上で必要となった。しかし，基礎看護技術の内容を系統的に分類した研究はなく，また著者により書籍内での技術内容の分類はまちまちであったため，今後の土台となるべく分類化を行った。

この分類は基礎看護技術に関する書籍の一般的な区分を参考にし，技術内容を４つに分類した。それらは，食事や清潔など日常人が必要とする「日常生活への援助技術」，罨法や与薬など医学的なテクニックを必要とする「診療時の援助技術」，記録や観察など日常生活への援助技術や診察時の援助技術に共通する「看護行為に共通する技術」，そしてどの分類にも入らない「看護研究」であった。

なおこの研究は過去の書籍を溯り，歴史的なうらずけを行うという点で歴史的研究であると判断し，

金沢大学医学部保健学科看護学専攻

表1　使用した書籍一覧表

発行年	書籍名、著者または編集者、出版社
1971年	看護学大系1　看護の基礎、福田邦三他監修、分光堂
1976年	系統看護学講座10　看護学総論、湯槙ます他著、医学書院
1982年	系統看護学講座10　看護学総論、湯槙ます他著、医学書院
1983年	最新看護学全書12　看護学総論　II、吉田時子他著、メヂカルフレンド社
1989年	新版看護学全書15　基礎看護学3、内藤寿喜子他著、メヂカルフレンド社
1991年	看護学大系8　看護の方法3　日常生活行動の援助技術、井上幸子他編、日本看護協会出版会
1993年	基礎看護技術第3版、氏家幸子著、医学書院
1994年	基礎看護技術第4版、氏家幸子著、医学書院
1995年	系統別看護学講座　基礎看護学2　基礎看護技術、薄井坦子他著、医学書院
1996年	標準看護学講座　基礎看護学2　基礎看護技術、杉野佳江編、金原出版
1997年	系統別看護学講座　基礎看護学2　基礎看護技術、薄井坦子他著、医学書院

そのためデータの分析は論理的方法を用いることとした。

結　果

1．全体的な推移

基礎看護技術の内容の推移にいくつかの特徴があった（図1）。まず教科書および副読本における看護技術の内容が年代とともに増加していた。掲載されている技術内容が看護研究を除く全ての分類（日常生活への援助技術，診療時の援助，看護行為に共通する技術）で増えており，かつ多種多彩になった。また，看護研究を除く3つの分類において，日常生活への援助技術と看護行為に共通する技術とに比べ，診療時の援助内容が著しく増加した。

また，1989年以降では技術内容が多種多彩で現時点では4つの分類に該当しにくい技術がみられた。1989年フィジカルアセスメント，生きる意味の援助，不安の除去，1991年サーカディアンサイクルへの援助，1994年疾病予防・健康教育，1995年地域看護，1997年災害時の看護であった。

2．日常生活への援助技術の推移

1971年の書籍では，人間が日常基本的に必要とすること，すなわち食事・栄養，排泄，清潔，衣着脱，休息・睡眠，体位を含めた行為について安楽を満たすための技術が説明されていた。質に関する援助では照明や温度調節などの環境に関する技術と活動・レクリエーションのみであった。そして，1976年の書籍より，リハビリテーションや事故防止のための安全に関する技術，1982年に移動時の援助技術が加わった。また，1971年の日常生活への援助技術では患者に対するもののみであったが，1983年にはボディメカニックスが取り上げられ，患者のみならず看護婦自身に対する技術内容が出現した。以後，日常生活への援助技術に関する主要な内容の増加はなかった。

3．診療時の援助技術の推移

1971年に看護婦の日常の業務における基本的な技術としての罨法，与薬，包帯法があった。また，日常の業務ではないが看護婦として避けることのできない人の死に対する援助として死後の処置があった。一般的に必要とされる救急時の看護もあった。1976年には手技的な援助がさらに加わった。それらは，身体各部位の測定，吸引・吸入，導尿，診察介助，手術に関する援助，採血に関する技術であった。以後さらに診療時の援助内容が増加した。1982年に浣腸，1983年に危篤時の看護，1989年にターミナルケアー，輸血に関する援助，検体・生体検査に対する援助が加わった。

4．看護行為に共通する技術内容の推移

1971年に情報収集，観察，看護計画，記録，事故に対する安全対策，バイタルサインズの測定が基本技術行為として上げられていた。1976年では看護過程が系統的に載っていた。

感染予防に関し，1971年に消毒・滅菌法のみであったのが，1982年に消毒・滅菌法を含む院内感染に対する援助が増え，技術内容自体の充実もみられた。それらは，ガウンテクニック，滅菌物の取り扱い，感染経路の遮断であった。

1982年にはコミュニケーション，1989年には患者への教育など，患者との関わりに関する技術が増加

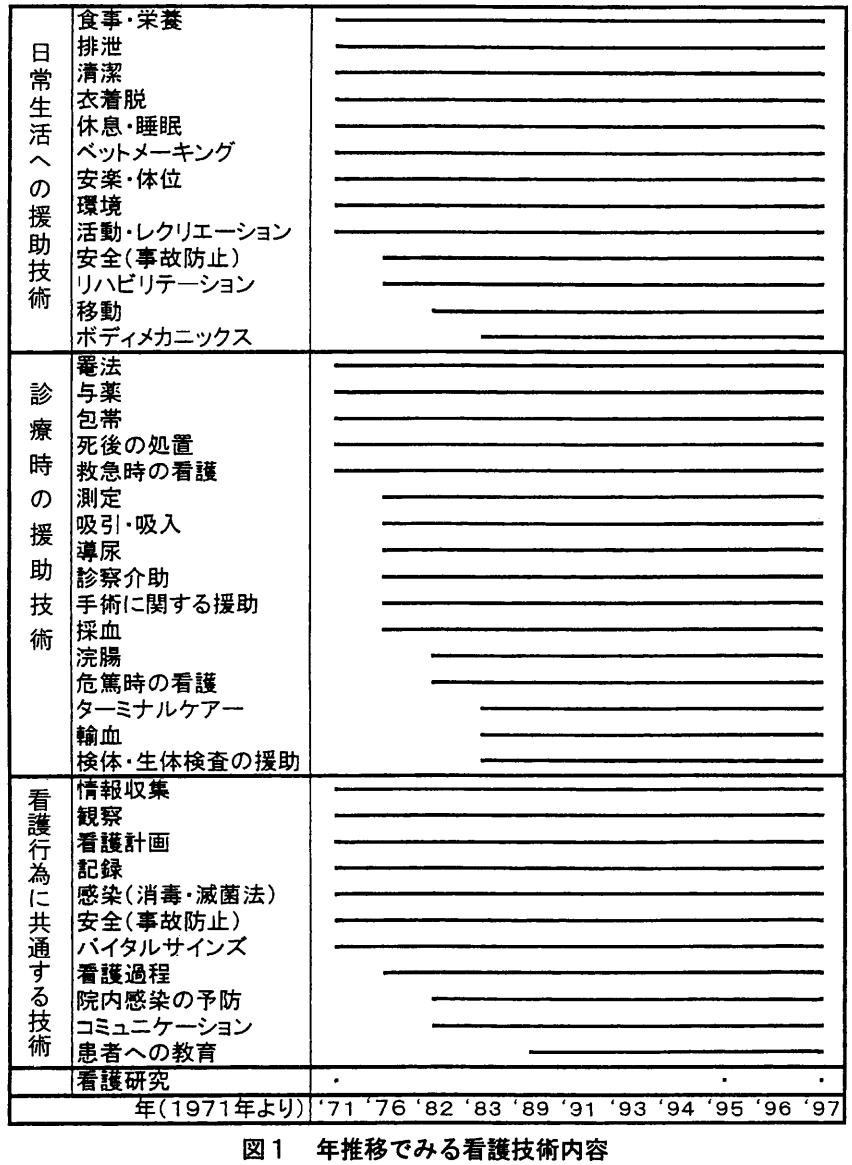

図1　年推移でみる看護技術内容

した。

看護研究は1971年，1995年，1997年のみであった。

考　察

書籍における看護技術の内容が看護研究を除く全ての分類において，年を追い増えたことに関して，いくつかの歴史的背景から考察する。

1982年までの内容には，国の政策が関与したと考えられる。1948年に厚生省に看護課が初めて設置され，各都道府県に看護係ができ，その中で看護教育の向上が叫ばれ，看護教育の充実が図られるようになった[4]。そして，1967年，看護婦教育のカリキュラムの改正による看護技術という科目の確立により，1967年以前の書籍を残念ながら手に入れられなかったが，1971年の書籍には当時の医療レベルに見合った援助技術の内容が網羅されていた。

また1982年以降の内容については，1970年代後半から始まった医療の高度化[4]が特に吸引・吸入，浣腸など診療に伴う援助技術を増加させ，その結果看護の教育者が学生の学ぶべき基礎技術の内容を増やす必要があると判断したために書籍での技術内容が増えたと考えられる。

しかし日常生活の援助技術では，1971年以降技術内容にそれほどの増加がみられなかった。これは日常生活における基本的な援助はすでに技術内容に確立されていたためであったと考えられる。それは今日の基本的な看護活動の原型となっているナイチンゲールの影響が日本の近代看護の成立時に存在して

いたためであった[5]。「看護覚え書」でナイチンゲールは患者に対する食事や環境の整備などの日常生活への援助の重要性を強調した。また同様に，看護行為に共通する技術もまた1970年にはすでに確立されていたといえる。しかし，看護過程については1974年に提唱された科学的看護論の影響で，1982年の書籍で科学的に看護展開することが基礎技術として位置づけされた。

一方戦後の日本では，ナイチンゲール以外の看護の先進国が日本の看護技術の内容に影響を与えた。特にアメリカからの影響は多大であった。終戦後，アメリカからの支援のもと，看護婦養成所のモデル校設置のみならず看護婦のための再教育や講習会が設けられ，看護教育のレベルアップが推し進められた[5]。その後も，国際看護婦協会（ICN）に参加し，連携を強め交流を図っている。その影響は大きく，例をあげると1983年の書籍でのボディメカニックスの登場は，ボディメカニックスの原理を看護に取り入れ出したアメリカからの影響であった。このように近年は特に国の政策よりも看護教師たちがアメリカの教育の影響を受けて技術内容が変遷していることが推察される。

一方1989年以降，技術内容がそれまで以上に多種多彩になったことに関しては，社会が求める医療の多様化が大きく影響している。たとえば1995年の地域看護に関しては近年の急激な老齢人口の増大により地域看護の充実の必要性が増したことや，1997年の災害時の看護に関しては1995年に起きた阪神大震災により，災害に対する看護の必要性をより強く自覚したためであった。それゆえ，今後の動向によりどの技術が基礎の内容となっていくのかますます混迷を呈しているといえる。

看護研究に関しては1971年，1995年，1997年の書籍にあるのみで，年代による何かの傾向はなく，著者による看護技術としての概念に入れるか，入れないかの違いによると思われる。

今回の研究の反省点として信頼性の低さを問題とした。まず，標本の数の少なさと偏りにある。現在にいたるまでいったい何冊の基礎看護技術の書籍が出版されたのか把握することができず，そのため全体の母集団の数すら把握していないため，いったい11冊の標本数にどれだけ信頼性をもつことができるのか不明な点であった。そして，書籍を執筆した著者や出版社の方針により掲載された援助技術内容に影響があったであろうが，現在手に入るだけの便宜的標本抽出のため同じ年度に発行された他の基礎技術の書籍同士で比較検討することができず，標本に偏りが存在することは否めないことであった。

そして歴史的研究において必然的に生じる問題であるが，得られたデータを分析，解釈，結論を出す際，研究者の主観が影響しやすく，一般化，普遍化が困難なことであった。

おわりに

今後の課題としては，今後益々増加する技術内容の中から，限られた時間内で具体的にどれを選定しどのように教育するかである。看護学総論やその他の看護学各科目との連携をしかっりともち基礎技術内容の選定をしたり，内容精選により対応していく必要がある[6]。

基礎看護技術教育は実践看護の土台をなすものであり，技術内容自体に関する看護研究ばかりでなく，現在の高度化する医療や変化する人口動態に対しいったいどの技術内容を教育すべきか看護の質を安定化，一定化させるために十分研究，検討されるべきである。

引用文献

1）野本百合子：臨床看護ケアー場面における看護技術に関する検討，看護基礎教育課程における基礎看護技術の教育を検討するために．看護教育研究，3(2)：26-30，1994.

2）保健婦・助産婦・看護婦学校養成所改正指定規則，指定条件，カリキュラム，許認可届出事項．看護教育，8(10)：6-10，1967.

3）保健婦助産婦看護婦学校養成所指定規則．看護教育，37(10)：789-796，1996.

4）看護史研究会編：看護学生のための日本看護史．120-136，医学書院，1989.

5）石原明他：看護史．167-186，医学書院，1984.

6）田島桂子他：基礎看護技術の教育の見直しとこれからの方向．看護教育，25(8)：475-484，1984.

Consideration about Contents Selections in Education of Nursing Skills : Analyzing Textbooks associated with Fundamentals of Nursing

Mayumi Kato, Michiko Inagaki, Junko Sugama
Kiyoko Higashiya, Akiko Tsuda